
【追憶の雫】

柚季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【追憶の雫】

【Nコード】

N3893C

【作者名】

柚季

【あらすじ】

雨は嫌い。貴方を思い出させるから。ねえ、だけど君は縋る私を許してくれる？

まだだ、と思った。まだ彼は私の前に現れる。

さあさあと降り始めた雨をみて溜息をついた。世界は臃氣に歪んで、樹々も向いのマンションもアパートも輪郭を無くす。

まだ、まだダメなんてね。

雨は嫌い。雨を好きな人が好きだったから。

雨は嫌い。彼と付き合った時の、お出かけした時の、別れた時の、記憶を思い出させるから。

「知哉、窓閉めて」

「なんで？」

「お願いだから……」

私は泣きそうな顔でもしてたんだろうか。慌てて窓を閉め、不安そうに眉をよせてぺたぺたと近寄って来る君。

一人暮らし1LDKのごく普通のアパートに、二人きり。他人から見れば恋人にでも見えるのかもしれないけれど、私たちは付き合いっではないなかった。

知哉は大学の後輩で時々家に遊びにきては、愚痴やら噂やらを聞いて、そして話していつてくれる。好意を持って接してくれてるのはわかってるけれど、私はまだ忘れられないんだ、彼を。

「雨、きらい？」

「大嫌い」

幸せな思い出が、幸せ過ぎた思い出が色濃く残って、湿った雨の香りと共に彼の残像をちらつかせる。

彼と別れて2年余り過ぎた今でも雨が降る度に、私の記憶の彼は微笑むの。

「そう」

理由も聞かずに寄り添って、いつもご馳走になってるし今日のご飯は僕が作るね。と優しく微笑む。君と過ごすのはきらいじゃないよ。むしろすごくすごく、あたたかくて心地いい。穏やかな木漏れ日のなかお昼寝してるみたい。

私は、君のそんな優しさに付け込んで縋ってるだけ。

「……ごめん、ね」

自分が酷く醜いものに感じる。どろどろと汚くて、元彼を引きづって、どうしようもなくなってるバカな女。

ねえ、わかってるんでしょ？ただ縋ってるだけだって。

だけど、なんで一緒にいてくれるのと聞けない私は心底だめ。離れていくのが怖い。怖くて、怖くて、はなせない、話せない、離せない。

「なんで、謝るの？」

「ごめん」

「ねえ、僕は自分の意思で一緒にいて、美香が考えてることだいたいは理解してるつもりだよ。美香が好きで頼って欲しくて、それは僕のエゴでしかないんだよ？」

それは、自分を見てくれなくても一緒にいたいって言うてくれるの？そんな報われなくて悲しいこと、わたしが言わせてるの？

「それは……」

優しさって、痛くもなるんだ。ちくりちくりと細い針でさされたみたい。心が、痛い。

「雨がきらいなら、聞こえなくしてあげる。思い出なんて考えらんなくしてあげる」

抱き寄せられた肩と知哉の真剣な表情に何をされるかわかっていた。だけど逃げなかったのは、哀しかったから。

私は君のこと嫌いじゃない。嫌いじゃないって言葉はそれ以上好きにならないための予防線だった。私は、彼を好きでいたかったから。

閉じた瞼、重なつた唇、塞がれた耳。くちゅりと脳髓に響いて、降り注いだのは甘い囁き。

舌を絡めとられて、口腔を荒らされる。淫らな水音は響くだけ。雨の音なんて聞こえない。思考がとろけていく。身体を君に委ねてしまう。

どしゃぶりの思い出は、君との思い出で埋まっていくかもしれないと、まるで雨で朧気になった世界のように歪んでいく思考のなか思った。

離れられなくなるよ、君から。このままじゃ。

「忘れられないなら、忘れなくていいから。だけど、僕はアイツのこと考えらんないくらい優しくする」

それはベッドのなかの甘いピロートークのように優しくて、目が眩みそうになった。

私は忘れたかったよ。君の優しさも愛情も受け止めてとるところに

酔ってしまつて、そうして君にも幸せをあげたいと思つていたから。
できるのかな、彼を忘れなくても。

「知哉……時間、かかってもいいかな」

見つめた先には、いつものやわらかな笑顔があつて、私は何故か
涙ぐんでいくのを感じていた。

雨はいつの間にか晴れていて、雲の隙間から眩しいくらいの光を
降らせていた。雲が晴れて行くと澄んだ高くて青い真夏の空にうつ
すらと虹が浮かんでゆっくり消えた。

それを見せてくれた雨がほんの少しだけ愛おしく感じて、君にそ
れを言ったら僕のおかげっぱいねと笑っていた。

完全に晴れ渡った空に、私たちの未来をみた気がして、私は微笑
んだ。

おわり

（後書き）

テーマが見えづらい拙い文章ですが、最後まで読み進めていただき
ありがとうございました（*――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3893c/>

【追憶の雫】

2010年12月14日21時25分発行